

T S Eliot International Summer School 2013

松本 真治

2013 年開催の第 5 回 T. S. International Summer School は、二つの意味で特別なものであった。

一つは、前年の 11 月に逝去されたヴァレリー・エリオット夫人を偲び、彼女に捧げるという宣言とともに今年のサマースクールははじまったことである。オープニング・セレモニーでのロナルド・シューハルト教授の講演は “Valeire Eliot and the State of Eliot Studies” と題されるものであった。

もう一つは、長らくこのサマースクールの責任者として活躍されたシューハルト教授が、今回限りでサマースクールの第一線から退かれるとのが報告されたことである。



*Professor Ronald Schuchard
at the welcome ceremonies*



*Professor Hugh Haughton
at St Magnus the Martyr*

参加者の国籍も多彩で、アルバニア、サウジアラビア、メキシコ、ポーランド、スウェーデンといった国も含め、18 カ国に及んだ。すべての参加学生がエリオットを専門に研究しているわけではない。学生のみならず、大学ですでに教鞭をとっている者や一般の文学愛好家の社会人も多く参加している。なお、学生の場合は参加に際して奨学金が支給される。

サマースクールは基本的に午前のレクチャーと午後のセミナーという形で構成される。レクチャーでは第一線の研究者がそれぞれ一時間程度講演し、まだ活字として出版されていない内容のものもあり、エリオット研究の最前線に触れる貴重な機会ともなる。セミナーは 8 つのテーマで開講され、少人数で各テーマについてディスカッションを行うものである。参加者全員がエリオット研究者ということではないため、基本的なテキスト解釈となることもあるが、あらためてエリオットを読みなおす機会ともなった。

夕方からは、大学近くのパブ The Lamb で、若い学生が中心となり自主的な「飲み会」が連日開催される。ときにはセミナー講師も参加し、ざっくばらんな話に花が咲く。午前のレクチャー、午後のセミナー、夜の飲み会、このすべてに参加するとさすがに体力的にきつかったが、それでも充実した 9 日間となった。



Sir Christopher Ricks

山口 敦子

Little Gidding



Little Gidding Church

サマースクール最初の日曜日(7月7日)のイベントはリトル・ギディングでの T. S. Eliot フェスティバルでした。ロンドンから北へコーチで約2時間、車窓に広がる長閑な田園風景を眺めながら到着したのは小さな村。

17世紀 Nicholas Ferrar が国教会のコミュニティを設立したこと、清教徒革命の中、チャールズ I 世が投降前にこの地に立ち寄ったことで、この村はエリオットにとって特別な意味をもつことになりました。

Robert Crawford 先生と詩人の Daljit Nagra 氏による”Little Gidding”の朗読、Schuchard 先生によるエリオット全集の進捗状況の報告、ご主人の美しいテノールの

歌声を交えながらの Nancy Hargrove 先生の”Eliot and Popular Music”の講演、Lyndall Gordon 先生の講演 “What

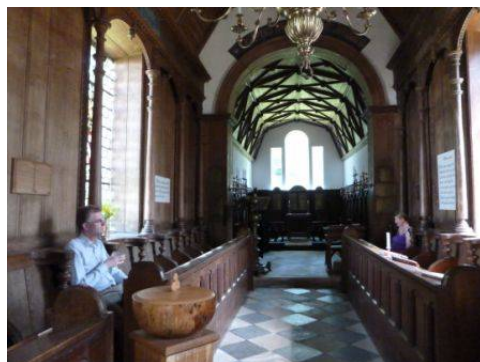
might have been and what has been: Eliot’s Search for Perfection in *Four Quartets*” と、盛りだくさんのプログラムが特設の大きなテントの中で進んでいきました。

プログラムの充実度、豊かさもさることながらフェスティバルを一層魅力的にしているのは私たちが受けた暖かい歓待です。ウェルカムドリンクにランチ、アフタヌーンティーと心を込めたおもてなしを受け、コミュニティが大切にした hospitality の精神が息づいていることを実感いたしました。



*The Annual Little Gidding Lecture
by Prof. L. Gordon*

プログラムを締めくくるのは教会での厳かな Evensong。今回は、フェスティバルのおもてなしを中心となって進めてくださった Friends of Little Gidding の Tony さんと Judith Hodgson さんご夫妻がその役割を果たされる最後のフェスティバルとなりました。



The inside of Little Gidding Church

太田 純

Burnt Norton



Burnt Norton

バスがバーント・ノートンに到着すると、参加者にランチパックが配られました。広い芝生にバラやハーブなど色とりどりの花が咲き乱れる、楽園のような庭で、私たちは思い思いの木陰でランチタイム。その後、庭の散策へ。”the drained pool” も明るい夏の日差しの中にありました。チョウやハチの飛び交う庭で、女主人の Caroline さんがバーント・ノートン館の由来を解説してくださり、“Burnt Norton” の朗読、Prof. Nancy Hargrove による講演 (“Burnt Norton’: Past, Present and Future”), そしてご主人 Prof. Guy Hargrove の珍しい表題曲と “Memory” (ミュージカル *Cats* より) の演奏と続けました。ホスピタリティあふれる美しい BN でした。

午後のセミナーでは、私は *Four Quartets* を読むクラスに参加しました。週末のバスツアーで、Little Gidding、Burnt Norton、East Coker の3カ所を訪ねることができるので、合わせて作品を読めば、理解が深まるのではないかと考えたからです。一人では行きにくい場所が多く、このサマー・スクールに参加してよかったと思っています。

また、通常の午前中のレクチャーに加え、St. Magnus the Martyr でのレクチャーや、旧ロンドン市街の散策、National Portrait Gallery のエリオット肖像画展、秋のオークションのためにヴァレリー夫人の遺品が展示されている Christie’s でのレセプションや詩の朗読など、10日間とは思えないほど充実したプログラムでした。

そして、講師の先生方と和やかな雰囲気の中でお話できたのは、何よりも貴重な体験でした。ランチティー・タイムには、さまざまな国から参加したエリオット研究者や愛好家と知り合うことができました。



“the drained pool”

鈴木 綾子

East Coker

前日の Burnt Norton に続いて最終日は East Coker を目指して片道 4 時間のバス旅行に出かけた。

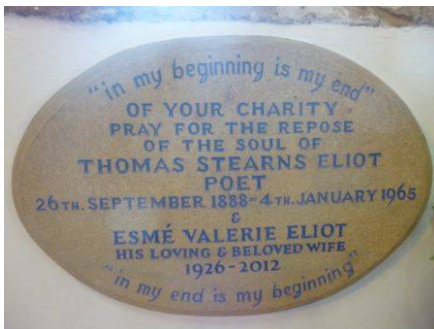
疲労と長旅を懸念したのか参加者がかなり減ったため、バス一台で出発。途中で Stonehenge を眺めたりしながら、ロンドンからひたすら南西へと走った。到着した Somerset 州に位置する East Coker village は Eliot が 1937 年に訪れた時と変わらないような桧皮葺の屋根と hamstone 造りの家が残る村であった。



St. Michael's Church

ランチは 15 世紀に建造されたという宿での屋外バイキング。そこから徒歩 5 分程の所に Eliot 夫妻が眠る St. Michael's Church がある。セミナーの期間中はメイン会場であった the Senate House 以外でもレクチャーが度々行われていたが、ここでは Megan

Quigley 先生による "Why East Coker is still Shocking" なる最終レクチャーがあった。それに先立って、参加していた院生 5 人による EC 朗読があった。前日に依頼されて緊張したとの話だったが、若い研究者に対する配慮が感じられるひと時であった。



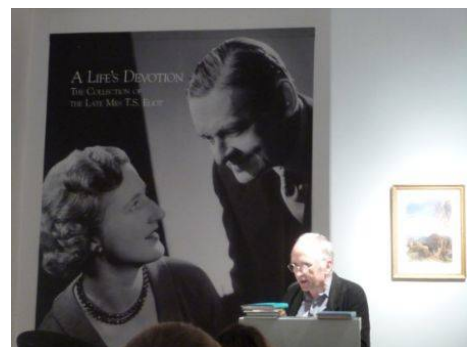
Eliot's remains rest with Valerie behind a wall plaque

Summer School を振り返って、特に印象的だったのは 7 日目夕方に、Valerie 夫人所蔵の絵画オークションが行われる Christie's で元 Faber & Faber 編集長 C.Reid 氏と R. Crawford 先生による Poetry reading とレセプションが企画されていたことである。二度と入ることのない

重厚な Christie's。そこに展示された絵画とエリオット夫妻の素敵な写真に囲まれた静かな空間を興味深く眺めました。

開催が日本の大学の授業期間なので、日本人はかなり参加しにくいかと思います。

しかし、個人的に楽しむ余裕がない位に盛りだくさんの予定を何とか最後まで楽しくこなし修了証書を頂けたのは主催者の熱意とおもてなしのお陰であり、今後もこのサマースクールがエリオット研究だけでなく幅広い研究の場であり続けていくことを願っています。



Poetry reading by Christopher Reid at Christie's